



はじめに

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪公立大都市科学・防災研究センター 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川崎, 修良 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/0002000483

はじめに

本冊子には、2022年8月に京都で実施したシンポジウム「文化プロジェクトと都市計画2-過渡期の都市計画を日本で進めるには？日仏の視点からのディスカッション-」で行われた日仏の研究者の講演とディスカッションの内容を採録した。その前段階として、2020年度に大阪市立大学先端的都市研究拠点共同利用事業・共同研究助成の採択を受けて実施したシンポジウムで得られた知見を基に、コロナ禍で海外渡航の難しい中、オンラインで日仏の研究者の交流を行なってきた。

2020年度の研究助成における課題の一つは「アートによる社会包摂」であった。この課題を受けて、著者らが実施した前回のシンポジウムおよび研究では、創造都市の重要な要素である芸術文化の創造性を活かした都市再生に向けて、その取り組みに学生が参画する事例を基に検証を行った。学生の包摂に目を向けたのは、都市創造に向けたプロジェクトを通して新たな職能が発生し、その職能者が育つ点に注目したからである。その成果については「創造都市における文化プロジェクトと担い手育成：フランス・ナント市と京都市を例に」（シリーズ24）に掲載した。

前回のシンポジウムで積み残した議論として「過渡期の都市計画」の持つアートプロジェクトの力による都市計画への影響を、日本における「まちづくり」を再考する手がかりにできないかという視点に踏み込んだのが今回のシンポジウムの趣旨である。副題にある「過渡期の都市計画」はフランスで« *urbanisme transitoire* »と呼ばれる都市再開発の手法の日本語訳である。これは、遊休地で展開される複数の一時的な文化プロジェクトを指し示す言葉であり、そのプロジェクト群は、全体としての都市計画の一環として本格的な再開発事業が着手される前の段階において、試みられている。*transitoire* は「暫定」と合わせて「通過」のニュアンスを持つ言葉であり、場所の過去、現在、未来の用途の間の質的なつながりが重視される。期間を区切って空地を活用するため日本では遊休地（未低利用地）の暫定利用の事例として紹介されるが、フランスには単に時限を限るニュアンスの *temporaire* を形容辞とした« *urbanisme temporaire* »なる用語もあり、明確に区

別されている。

それでは長期的な視点を持った都市計画の一環として文化プロジェクトを位置付けるには何が必要なのか。遊休地の暫定利用と都市計画の関係がこれを紐解く一つの手がかりになるのではないだろうか。この問いを持ってシンポジウムでは「過渡期の都市計画を日本で進めるには？」をテーマに議論を進めた。1章では日本の現在の取り組みに対する問題提起のために「日本の都市再開発の中での文化プロジェクトの位置付け」を確認し、日仏の遊休地に対する暫定利用の考え方にある差異を提示した。2章・3章ではフランスの研究者が過渡期の都市計画の事例の紹介をしつつ、都市空間の変容に対する文化プロジェクトの貢献について論じた。本書では、原文（2章）と日本語訳（3章）を掲載している。4章では、フランス文化政策の研究者に過渡期の都市計画のような考え方が生まれた政策的な背景を、1、2、3章を踏まえたコメントの形で論じていただいた。5章では、コメントに対する応答と、現在日仏で起こっている動きを踏まえた今後の展望に関するディスカッションの一部を掲載した。

シンポジウムでは、遊休地に対する暫定利用を糸口とした日仏の対話から、都市計画制度の射程や文化政策と都市計画の関係性（1章）、都市計画に関する職能観やアートに対する期待（2・3章）、公共空間の領有と構築についての考え方（4章）などに差異があることが見えてきた。「都市計画」と«urbanisme»、「まちづくり」と«fabrique urbaine/fabrique de la ville»などの日仏の用語は直訳すると同義に捉えられがちであるが、実際はそれぞれの国の都市に対する議論や制度的な蓄積、土地や空間の公共性に対する市民の感覚、中央と地方の関係や統治機構の権限、行政職の機能に対する考え方、政治的・文化的土壌としての失敗や実験的な挑戦に対する寛容性（tolérance）などを背景として積み上げられてきた考え方である。文化プロジェクトと都市計画の関係を深めるのであれば、問題は単に有休地の暫定利用の技法の輸入や導入の方法ではなく、都市開発、文化政策、まちづくり等を横断的に捉え、暫定的なプロジェクトとそれぞれの相互関係を考えていく必要があるのではなかろうか。

川崎 修良